明日を語ろう!

北の農業人

KITANO NOUGYOUBITO

北海道農業に限りない愛情を注ぎ、
たゆまぬ努力を続ける人々がいます。
農業の未来を創造する「北の農業人」の
情熱や取り組みをご紹介します。

●「サムシングブルー」にかけ婚礼装花に使用されるブルースター。ロマンチックさが近藤さんを引きつけています。「8割が東京・大坂への出荷です。今年はブルースターをハウス1棟分、スターチスを4棟分生産しています。花の出荷は7月頭から始まります」

●新時代の感覚とあくなき探究心で道を切り拓く

広域JAならではの多様なネットワークを刺激と力に変えて挑み続ける。「農業を楽しむ姿勢を持ち続け、経営の安定と拡大を実現したい」

［深川市］

近藤洋介さん

離れたことであらためて農業の魅力に気づきUターン

空知管内北部に位置する深川市は、一級河川の石狩川、雨竜川がもたらす水に恵まれた北海道有数の農業地帯です。農家の5代目である近藤洋介さんは、近藤家の長男。しかしご本人は「昔から手伝いはしていましたけど、正直、家業を継ぐ気はなかったんですよ」と笑います。「大学卒業後はIT系の企業に就職しました。しかし、まったく畑違いの仕事をしたことで、逆に農業という仕事のおもしろさに気づいた」。結果、自らの意志で故郷のメム地区にもどり、今では農家以外の人生が考えられないほどだそうです。

故郷に戻った近藤さんは、生産に励むかたわら、農協が運営する農産物直売所で働き始めます。「やっぱりどんな仕事でも人とのつながりが大事ですから。2年ほど働く中で、農協の方や地区の生産者さんと広くつながることができました」。農家としてのネットワークの広がりは、近藤さんの言葉通り、生産活動に新たな風を吹き込むことにつながっていきました。

水稲と花き栽培を二本柱に攻めの姿勢で経営拡大を模索

近藤さんは4年前から花きの栽培に挑戦しています。主力作物は水稲ですが、耕作面積は地域の平均よりも少ない12ヘクタールほど。その田んぼも数カ所に飛び地で存在するため作業効率は決して良いとはいえず、安定経営のためにはもうひとつ、経営の柱となる作物の生産が不可欠でした。「そこで花を選んだのは、ひとつには利益率の高さ。もうひとつは、単純に花が好きだったからです」

花き生産者の少ないメム地区で近藤青年の挑戦を支えてくれたのは、直売所勤務を通じて出会った農協職員でした。「こんな品種があるよと情報をくださって。栽培に取り組んできた品種・ブルースターの存在もその時知りました」。初年度こそ苦労したものの、試行錯誤の甲斐あり翌年から生産は軌道に乗り出します。ただしご本人は、「理想にはまだ、あと少しというところ。もっと工夫を重ね、さらなる主力作物に育てたい」との弁。まだまだ、創意工夫の意欲はつきません。

●地域の防除団体「深川エアーサービス」に所属しオペレーターとして活躍する近藤さん。JAきたそらちの若手生産者の8割はオペレーターの資格を保有しているそう。「無人ヘリは地域農業の維持に重要な役割を果たしています」

●水田は田植えが済んだばかり。今年は生憎の天候で作業は少し遅れ気味でした。「メム地区は午後から強風が吹くので、田植えは早朝からスタートし、早めに切り上げます。午後は他の作物の作業にあてることが多いですね。」お伺いした時期は大豆のは種が終わったばかり。秋には小麦を生産しているそうです。

「どの生産者にも、経営拡大を考える時期はあるでしょう。必要に迫られてのケースもあると思いますが、私はやるなら楽しんで取り組みたいし、それが成功の鍵だと思います。後手に回るのではなく、確固たるビジョンと計画性を持って、攻めの姿勢で健全な経営拡大を行っていきたいと考えています」

人との交流は大きな財産挑戦し続ける農家でありたい

こうした近藤さんの前向きさは、お父様の辰哉さん譲りのようです。「父は若い頃米国へ農業留学し、その経験をもとに養豚や長いも生産など、数多くのことに挑んできました」。失敗も多々あったそうですが、辰哉さんの活動は地域に新たな特産品を生む原動力になりました。また、辰哉さんは産業用無人ヘリコプターの道内導入に尽力した一人でもあります。こうしたパイオニアの存在は、地域農業に次の展開を生む力になります。

「私も父と同じで、始める前から可能性を否定したくないタイプ」と笑う近藤さんも、ご自身の持つIT技術を駆使して青年部のホームページを制作・運営し、新たなかたちで地域の魅力発信に貢献。昨年はJAきたそらちの青年部部長として、地域農業の活性化に率先して取り組んできました。そのひとつが、札幌でのイベント開催です。農協と深川市の協力を得て7月から11月まで毎月、特産品の米や果樹を販売。若者の感覚で、地元の「ゆるキャラ」も活用しました。「イベントで消費者の生の声を聞き、青年部員の意識は変わりましたよ。農作業繁忙期のイベントは大変でしたが、利益以上の価値があったと実感しています」と近藤さん。

また、青年部活動を通して得た、広域JAならではと言える多くの人とのつながりも、とても良い刺激になったそうです。

「私は、この家に生まれたからではなく、自分が望んで農家になった。その選択に誇りを持ち、楽しんで農業に邁進したい。そのための挑戦が、やがて地域のプラスになっていってくれればそれはうれしいことです」。取材日は長く続いた雨が上がり、青空の広がる日でした。澄んだ空と彼方の音江山を臨む近藤さんの屈託のない笑顔に、農村に息づく若手農業者のパワーと、可能性を感じた一日でした。

●昨年息子さんが生まれたばかり。「無理に跡継ぎにとは考えていません。自分自身がそうでしたからね。自ら選ぶなら止めませんけども(笑)」とのこと。